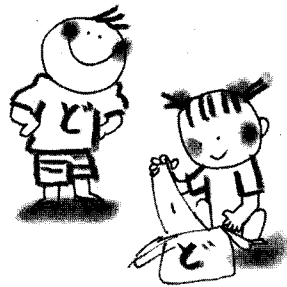


特 集

子 ども と 水

夢 中 に な れ る も の — 水 の 遊 び

井 上 真 奈



「はだしになってもいい？」
「どうぞ。」

四月から十一月ごろまでの雨が降っていない日には、一日に何度も、子どもと保育者の間でこのやりとりが行われます。脱いだ靴下を上履きの中に入れて、子どもたちは意気揚々と園庭へ駆け出し、思いの遊びを楽しんでいます。はだしになった子どもたちは、必ずと言っていいほど、水を使った遊びをしています。地面に座り込んで、気持ちよさそう

に泥を手でかき混ぜている三歳児。花や葉や実をすり鉢でつぶしては、「ジュース」「お茶」「カルピス」と何色もの色水を作る四歳児。砂場いっぱい大きな山や川、橋や線路を作る五歳児。彼らにとつて、水は遊びに欠かすことのできない要素です。夢中になって遊んでいる子どもたちの姿を見ていると、時どきふと、私に保育の道を志すきっかけを与えてくれた、地球の裏側に暮らす子どもたちのことを思い出します。

中米コスタリカの子どもたち

大学時代、スペイン語を専攻していた私は、語学習得のため中米コスタリカに滞在していました。スペイン語で「豊かな海岸」を意味するコスタリカは中米のちょうど真ん中辺りにあり、九州と四国を合わせたほどの面積に、四百万人ほどの人々が暮らしています。一年は、一日に一度はスコールが降る雨期（五月から十一月）と、乾期（十二月から四月）の二つの季節に分かれています。年間を通して平均気温二十度程度の常春の気候が特徴で、八百五十種類の鳥類と約千種類の蝶が生息、また世界に生息する八種のうち、六種類のウミガメが産卵にやってくるという自然豊かな国です。

○歳の男の子がいる家庭にホームステイした私は、生まれて初めて、子どもとかわる生活を体験しました。また、近所に住む幼い子どもたちから容

赦なく浴びせかけられる「なんで？」の嵐が、私の語学力を鍛えてくれました。

コスタリカの人々の中には「子どもは宝である」という考えが浸透していて、街の中でも男性・女性を問わず、子どもを見かければほほ笑み掛けたり、話し掛けたりする姿があらちちらで見られます。

たまたま同じバスに乗り合わせた年配の女性が、泣いている赤ちゃんを抱いた若い母親に「なんてかわいいんでしょ」と話し掛けたのをきっかけに、何人もの女性が「うちの子のときはこうだった」、「この時期にはこんなものを食べさせるといい」と子育て談議が始まり、気がつけばバスを乗り越してしまふ人が出る程の盛り上がり……。日本では、ぐずるわが子を抱き、身を縮めるように電車やバスに乗っている母親をよく見ていたので、人々の子どもへの関心の深さに驚かされました。

仕事をもつ母親のために子どもを預かったり、育

児の相談に乗ったり、代わりに買い物に行ったりという、近所同士の助け合いも、頻繁に行われています。大きな子育て支援というのではなく、身近な子どもの成長に関心をもち、それぞれができる範囲でかかわっているという人々の関係は、とても温かく、自然なものに感じられました。私も初めは赤ちゃんの抱き方すらわからなかったのに、気づけば勉強の傍らあやし、おしめを替え、ミルクをやる生活が日常となり、週に何日か、家で数時間預かっている近所の子どもたちと遊ぶことを、楽しむようになっていました。外国語の中に絶えず身を置いている緊張感を、子どもたちと過ごす時間が和らげてくれていたのかもしれない。こうして私は、コストリカ流子育ての輪の一部に入り込んでいきました。

近所を散歩しながら色とりどりの花を摘んできて色水を作り、それで紙に絵を描いたり、つめに塗ってマニキュア屋さんごっこをしたり、ジューススタンドごっこをしたり、庭の土を掘って山を作り、トンネルを通して水を流す工事現場ごっこをしたり、泥でパンやケーキを作ったり、同じ遊びに飽きることなく何日も、試行錯誤を繰り返したものです。子どもたちは水を使った遊びが大好きでした。スコールの後のぬかるみにしゃがみ込み、頭のとっぺんから足の先までチョコレイト色にして遊んでいる彼らの姿は、まるで絵本『おなかのすくさんば』（片山健作・絵 福音館書店一九八一年）の主人公のよう。しっかり遊んでお腹がすくころには、ちょうど母親が迎えにきて、それぞれの家へと帰って行きます。

今現在、私がかかっている子どもたちも、雨がやんだ後の園庭にしゃがみ込んで、ぬかるみに手を浸して感触をじっくりと味わったり、泥だんごをいくつも作ったりしています。彼らの姿を見ながらコストリカで過ごした日々を思い返してみると、子どもの好奇心や探究心を満たしてくれる遊びの素材

は、時代や場所にかかわらず変わらないものなのだなと感じます。

どろんとAくん

私が勤めている園では、子どもたちも保護者も、汚れを気にせず、水遊び・泥遊びを楽しめるよう、それぞれに「ど」と書かれたTシャツとパンツとズボンと、体を拭くためのタオルを、ビニール袋に入れた「どろんこセット」を一つ作ってもらっています。五月後半から夏休み前までは、特にこの「どろんこセット」が大活躍し、子どもたちはたっぷりと水や泥の感触を味わいます。ほとんどの子どもがそんなりと遊びに入っていく中、Aくんはなかなかその感触を楽しめずにいました。

三年保育で入園したAくんは、クラスで最後に誕生日を迎える男の子で、入園当初は、同じクラスの子どもたちが「先生、赤ちゃんがいるよ」と言うほ

ど、身体も小さな子どもでした。Aくんは入園するまでに、水や砂や泥で遊んだ経験が少なく、外をはだして歩いた経験もなかったので、初めてはだして園庭に出たときには、体が固まってしまったかのように目を見開いて、ただ立っていました。その後も保育者に手をひかれてどろんこの中を歩いては大泣き、手のひらに泥を乗せられては大泣きの繰り返しでした。夏のプール遊びも、彼にとっては初めての経験で、水の中に入ったとたん、火がついたように泣きだし、こちらも結局楽しむところまでは程遠い状態のまま日程を終了。年少の間は、水遊びも泥遊びも楽しむことはありませんでした。

Aくんも年中クラスに進級し、またどろんこの季節がやってきました。クラスの子どもたちが自由遊びの時間に「はだしになってもいい？」と聞いてくる中、「ぼくは靴を履いているの」と言いに来る彼をどう泥遊びへ誘おうか、担任の私はどのようにか

かわっていけばいいだろうかと思いを巡らせていました。そんなときに力を貸してくれたのが、「こぐまちゃんのどろあそび」(わかやまけん絵 森比左志文 わだよしおみ文 こぐま社 一九七九年)、「こぐまちゃんのみずあそび」(同一九八〇年)、「どろんどろんこー」(わたなべしげお文 おおともやすお絵 福音館書店 一九八九年)などの絵本でした。どれも、もつと幼い子どもが楽しむ絵本ですが、その年ごろに水や泥に出合わなかったAくんには、ちょうど良かったようです。自由遊びの時間にAくんを含めた何人かと一緒に絵本をめくりながら「もうちょっと暖かくなったら、どろんこセットを着て遊ぼうね」と話すと、わくわくした様子で早くやりたいたと口々に言う子どもたちに混ざって、Aくんからも「ぼくもやる」の声。経験したことを整理して自分のものとするための時間が、Aくんには長めに必要だったようです。

クラス全員で「どろんこセット」に着替えて遊ぶ最初の日には、昨年度の姿がうそのようにすんなりとはだして園庭へ出て行きました。初めのうちは、泥を手渡されてもどうしたらいいのかわからない表情をしていましたが、日を追うごとにその感触になじみ、一か月が経つころには自分から泥を手にとって、おだんごやハンバーグ作りを楽しむように。また、葉や花で色水を作ることも興味をもち、時間をかけて大切そうに作っては、毎日のように家族にプレゼントするようになりました。その後のプールにも泣かずに入り、顔をつけることや、ワニ泳ぎに挑戦するAくんの成長ぶりには、本当に驚かされました。

今年度も、水遊び・泥遊びの季節がやってきました。今年子どもたちのどんな経験に立ち会えるのか楽しみです。